

日中国交正常化30周年記念/日本における中国年

遥かなる大地

Far and away, mother earth.

中国文化の源流を求めて

An Exploration of the Sources of Chinese Cultural Heritage.
Exhibition by Feng Xue-Min at the Tokyo Metropolitan Museum of Photography.

2002年 11月23日(土)～12月15日(日) 開館時間:10:00～18:00、木・金は20:00まで ※入館は閉館の30分前まで/毎週月曜日休館

アメリカ、カナダ、フランスでも高い評価を得た写真家馮學敏の故郷シリーズ
「稲作の故郷」約60点、「紹興酒の故郷」約40点、「長白山参の故郷」約10点、
「景德鎮・磁器の故郷」約30点、「プーアール茶の故郷」約60点、合計約200点。



稲作の故郷、雲南—天空の棚田

雲南は私の青春時代であり、歳月を刻んだ第二の故郷でもあります。二十年后にまた新たにこの太古の幻想に包まれた赤い大地を踏みしめ、神秘的な哀牢山脈に位置する元陽県へ入ると、あの聲え立つ厳しい山々にもう一度感動させられます。元陽の棚田は山々に漏れ在し、美しく重なりあって、延々と伸びています。日が暮れると、夕焼けが天辺を赤紫に映し出し、緑の絨毯のような棚田は一層高く深い、詩に描かれた世界のようなです。元陽の雲海は瞬時に表情豊かな変化を見せてくれます。ある時は睡っている竜のように、またある時には紅河谷と哀牢山脈の間にまとわり立ち昇っていきます。哀牢山に暮らすハニ族、イー族は代々ここで強い意志をもって厳しい自然環境と闘い、智慧を持って動植物に働き、美しい棚田を作り上げ、独自の稲作棚田文化を構築しました。二千年の歴史を持つハニ族とイー族は、大山を彫刻するとともに堅忍不拔の民族気概、寛容楽観な気質をも描き出してきました。等分に分けた棚田の環線は年輪のように青空の下に刻み込んでいて、まさに永遠に色あせない歴史版画のようです。そこは私が生活し、奮闘した、自分の生涯と切っても切れない雲南であります。—— 馮學敏

馮學敏展

ひょう がくびん/Feng Xue-Min

東京都写真美術館〈3階展示室〉

Tokyo Metropolitan Museum of Photography

恵比寿ガーデンプレイス内

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 TEL.03-3280-0099

主催:馮學敏写真展実行委員会/朝日新聞社 共催:東京都写真美術館

後援:外務省/文化庁/NHK/中国大使館/新華社/人民日報海外版/光明日報/中国新聞社/文匯報 協賛:TOYOTA/Kodak/再春館製薬所/SIGMA 協力:堀内カラー/フレームマン/凸版印刷/アサツー ディ・ケイ

入場料:一般500円(400円)/学生400円(320円)/中高生・65歳以上250円(200円)/小学生以下無料 ※()内は団体(20名以上)料金です。

写真美術館友の会会員・お体に障害をお持ちの方は無料/アトレカード会員・三越カード会員は2割引/第3水曜日は65歳以上無料

故郷への愛着と憧憬を写真に刻む映像詩人 馮學敏

馮學敏——彼は生涯にわたるエトランゼである。偉大な文学者や画家、音楽家達の多くが旅によって育まれたように、彼もまた旅によって自らの芸術性を育んできた写真家といえよう。馮の最初の旅は30年も昔にさかのぼる。文化大革命のさなか、彼は17歳という若さと無垢な精神で、大都会上海からミャンマー国境に近い雲南省最南部シーサンパンナの開拓地へと下放される。かけ離れた気候や風土、異なる民族、それまでの価値観や常識が微塵も通用しない世界。幾多の葛藤、不安といったものに苛まれたことは想像するに難くない。しかし馮のしなやかな精神はそうしたものを見事にはねのけ、その後10年間にわたり苦闘を重ね、雲南の大地に敢然と挑み続けるのである。その原動力になったのが故国の大地とそれが育んだ文化への深い愛着と絶ゆまぬ憧憬であった。その当時、馮の手元に写真機材はなく、あるのはただ豊かな感受性というファインダーを通して、心のひだに留めた無数の情景や風景であったに違いない。その後上海に戻った馮は写真を学び上海画報写真記者を経て、二度目の長い旅になる日本へと旅立つことになる。日大芸術学部写真科研究生を経て、(株)アサツー ディ・ケイ写真部に商業写真を撮るようになって、決して絶えることなく彼を駆り立てたのはあの雲南で培った大地への思い、故国への愛着、文化への誇りであり、それを映像芸術へと昇華させることであった。馮の故国、中国帰郷への旅は堰を切ったように始まり、すでにもう50回以上にも達している。「紹興酒の故郷」浙江省への旅、「長白山参の故郷」吉林省への旅、「景德鎮・磁器の故郷」江西省への旅、「プーアール茶の故郷」雲南省への旅と続き、今回の展覧会のハイライトとなる「稲作の故郷」雲南省の旅へと連なっている。それぞれに思い入れのある故郷シリーズだが、エトランゼであるからこそ心の底からわき上がる故国の山河、文化、そこで暮らす

人々に対する讃歌が作品の中から立ち昇り、見る人を圧倒し、静謐ながらも力強い感動を与えるのであろう。それぞれの土地と人々の間に深くとけ込み、まるでレンズを通して対話するかのような撮影技法こそ彼特有のもので、そこには作者を感じさせないまさに自然体の人々の暮らしぶりや表情が生生きと描写されている。意図的でないという意図、この逆説こそ馮の写真の芸術性を高めるひとつの重要な鍵となっている。数ある故郷シリーズの中でもとりわけ雲南省への旅は馮にとって特別な意味を持っており、彼自身実際にこう語っている。「雲南省シーサンパンナは私の生命の一里塚となりました。シーサンパンナを離れてからの歳月、私は紹興、長白山、景德鎮、上海、富士山、セース川など私の心を感動させる一切を撮影してきましたが、雲南はまだでした。それはまさに雲南シーサンパンナに対する思いが私に密かにまとわりつき、撮影したい強烈な思いがある反面、軽々しく足を踏み入れる勇気がなかったからです。」馮の心の中で止まったままになっていた時計はついに動きだし、壮大な天空の棚田、人々の生き生きとした暮らしがつつぎに映像芸術として生み出されていくことになる。馮の作品は彼の故国中国ではもちろんのこと、アメリカ、カナダ、フランスでもすでに高い評価を得ており、我々日本人にとっても何か懐かしい香りを漂わしている。それは日本の稲作のルーツである雲南や有田焼のルーツといわれる景德鎮に何故か心惹かれるものがあるからだろうか。1999年、馮の作品が太陽賞大賞に輝いたのもそうした評価の証といえよう。—— 馮學敏写真展実行委員会



紹興酒の故郷

紹興は水路が町の至る所に張り巡らされている表情豊かな古都です。また二千年以上の歴史と伝統に培われた世界三大醸造酒のひとつである紹興酒の故郷としても知られています。有名な作家魯迅生誕の地であるとともに、私の母の故郷でもあります。黒い羅紗帽子をかぶった市井の人々、行き交う烏篷船、クリークに聳えるアーチ橋、紹興酒の造り酒屋、一幅の風景の中に私が求めたのは近代化によって失われつつある風情と紹興の人々の素朴で、人情にあふれる姿です。



長白山参の故郷

長白山脈は古くは不咸山と呼ばれ、人烟隔絶、山径険悪の地といわれ、今なお原始以来の自然が残っています。また清民族の聖祖生誕の地とされ長い間封山されたこともあります。ここに産する長白山参は稀少珍品で、有効成分が高く漢方薬として珍重されています。人参取りは神聖な仕事とされ、シャーマニズムに則った厳しい掟と儀式の中で代々引き継がれています。雄大な山河、そして神秘的な人々の営みは私の創作力をいやがうえにも高めてくれました。

景德鎮・磁器の故郷

Chinaが英語で中国の国号を表すと同時に磁器を指すことから分かる通り、景德鎮は数ある中国文化の中でも群を抜いて世界に誇る文化遺産です。しかしそれは特定の芸術家によってなされたものではなく、無名の巨匠達が二千年に及ぶ長い歴史の中で培ってきた伝統工芸文化です。土と炎を操る技術、磁器を彩る装飾や釉薬を操る芸術、それらの技が相まみえ悠久の時と研鑽の中で磨かれた景德鎮磁器。それを育んだ風土、町並み、窯工達、絵付け師達の暮らしや人情に、私は深いシンパシーを感じずにいられません。



プーアール茶の故郷

文化とは人の営みが長い年月をかけて築き上げるものです。お茶という文化もそのひとつ。製法はもとより飲み方、作法など歳月が洗練し、世界中で様々なテイストとスタイルのお茶が楽しまれています。中国が世界に誇るお茶の文化、そのルーツが雲南省にあります。この地から茶馬古道を經る中国全土へ、一部はチベットを経由してインドへとたらされ、さらにはヨーロッパ、また東南アジア、日本へと伝えられたのです。しかもその雲南省は私にとって多感な青年時代を過ごした第二の故郷なのです。



馮學敏

ひょう がくびん/Feng Xue-Min

■略歴

1953年 中国上海生まれ
1970年 雲南農場知識青年となる
1982年 上海画報社写真記者となる
1985年 中国新聞出版協会国費研修生として来日、講談社写真部に研修
1989年 日本大学芸術学部研究所研究生となる
1991年 日本(株)旭通信社(現アサツー ディ・ケイ)写真部入社
1995年 日本(株)旭通信社(現アサツー ディ・ケイ)写真部副部長
1996年 北京人民大会堂で開幕セレブションを催した、中国中央テレビの番組「東方の子」で紹介される
1997年 上海師範大学客員教授となる
1999年 日本NHK BS番組で紹介される
2000年 アメリカ・ロサンゼルス写真家協会名誉顧問となる
アメリカ・アルハンブラ市、モントレイパーク市名誉市民となる
中国文化部より「世界華人傑出芸術家」の称号を受ける
2002年 NHK BSハイビジョンにて「天空の棚田」が放送される

■会員

1988年 中国写真家協会会員となる
2001年 日本写真家協会会員となる
■個展/1986年～2002年

「日本、東京、朋友」「馮學敏日本滞在写真展」「紹興酒の故郷」「長白山参の故郷」「景德鎮・磁器の故郷」「馮學敏写真展」「雲南、馮學敏写真展」「故郷、馮學敏写真展」「雲南、プーアール茶の故郷」「雲南、天空の棚田」北京中国美術館、上海美術館、雲南省博物館、台北および日本、米国、カナダ、フランスにて開催

■巡回展

1999年 太陽賞受賞作品「雲南」日本全国巡回展

■写真集

「馮學敏撮影芸術」「日本ショウウィンドウ芸術」「長白山参」「日本ショウウィンドウ造形芸術」「紹興酒の故郷」「景德鎮・磁器の故郷」「プーアール茶の故郷」

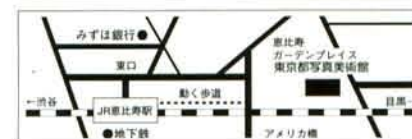
■収蔵

中国美術館に作品4点収蔵、上海美術館に作品6点収蔵

■受賞

1999年 日本第36回「太陽賞」大賞受賞
2000年「世界華人芸術大賞」金賞受賞

〈馮學敏ギャラリートーク〉作家自らによる作品解説を行います。(会期中毎週日曜日14:00～16:00)



東京都写真美術館

開館時間:10:00～18:00、木・金は20:00まで ※入館は閉館の30分前まで/毎週月曜日休館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 TEL.03-3280-0099 FAX 03-3280-0033 <http://www.tokyo-photo-museum.or.jp>

JR恵比寿駅東口より徒歩7分(恵比寿ガーデンプレイス内)

※当館には専用駐車場はありません。お車でご来館の際は恵比寿ガーデンプレイス内の駐車場をご利用ください。